



1. 各地の読書会

読書会に参加して

西川 慶子(都賀)

私と友人二人は11月21日(土)に都賀で行われた、「聖書のルルター」に出席させて頂きました。美味しいケーキとお茶を頂いて、くつろいだ雰囲気の中、水谷先生のお話を伺いました。

看護師である友人は、本の内容と水谷先生の生き方が一致しており、特に人を色眼鏡で見ることなくありのまま受け入れることの大切さが最も心に響いたようです。実際クリスチヤンでもない自分を優しく分け隔てなく受け入れてくれる雰囲気を肌で感じたことも語っておりました。

そして小池辰雄先生の本はとても内容が深く、少し独特的の文体で読みづらい点もありましたが、水谷先生のわかりやすい言葉に置き換えたお話が、驚くほど得て心に沁みる内容だったようです。

水谷先生は、キリスト教は宗教という観念的なものではなく、人生そのものの生き方を教えてくれるものであり、人々はその真理を知りたくて集まつて来ると語られ、全くその通りだと思えました。そして自己犠牲と隣人愛に徹したイエスキリストの生涯と同じように聖書の真理に立って、何事にも恐れなく挑む破天荒なまでの先生の生き方には、ただただ敬服するばかりです。

またルターに関しては、16世紀に宗教改革をした歴史上の偉大な人物で信仰義認を強調したこと位で、その人となりはあまり知りませんでした。しかし、今回の読書会を通して、ルターが人々に対する愛の深い正義に燃えた情熱的な行動力のある人だと分かりました。そして何より広い視野を持ったウイットに富んだ魅力的な人物であるこのような器を神様は用いられたという事に感銘を受けました。

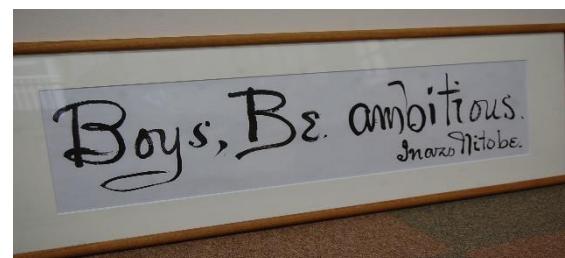
このようにこの読書会は、クリスチヤンもノンクリスチヤンでも、双方に関心のある所に深い示唆が与えられることを感じます。

読書会の後は、ナースステーションを見学させていただきました。看護師と介護福祉士の友人が、岸本みくにさんの連載「しあわせな看取り」を興味深く読んでおり、ご本人に会ってお話しできることに感謝一杯でとにかく感激しておりました。

恵泉塾は教会の働きとナースステーションの働きが一体化されていることに私としては、深い関心を抱いております。福音を語るだけでなく、実際に見える形で弱い人々に愛をもって仕える働きが行われているのに深い感動を覚えます。このような尊い働きが益々広がっていきますように。

2. 新渡戸稻造の書

山口佳三北大総長から水谷幹夫師へ寄贈された新渡戸稻造の書。Boys, Be ambitious(札幌農学校 クラーク博士の言葉)。若者へのメッセージとして小池辰雄記念図書室に掲げられた。



小池辰雄を読む会

●余市「無の神学」

2017年1月1日(日) 13:30~15:00
余市郡余市町豊丘町370-9 恵泉祈りの家
*会費:無料(自由献金)
*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札幌「無者キリスト」

2017年1月7日(土) 13:30~15:00
札幌市南区川沿10条3-10-5 札幌祈りの家
*会費:無料(自由献金)
*連絡先:011-571-2348(浅井)

●都賀「聖書のルルター」

2016年12月17日(土) 10:00~12:00
2017年1月14日(土) 10:00~12:00
千葉市若葉区都賀3-24-8 都賀プロザ 5F
*会費:1000円
*連絡先:043-235-3815(石丸)
*準備のため、出席のご連絡をお願いします。
*予習不要・初心者歓迎

本図書室は献金で運営されています。

図書室便りは隔月発行です。

ドイツへの決別

辰雄が亡くなったとき、葬儀屋が来て祭壇に飾る写真を決めた。たまたま応接間に飾ってあったドイツの十字勲章を胸につけたりっぱな写真がよろしかろうというのである。早速壁から外して写真を取り出そうとすると、十字勲章を胸にかけた写真の裏にマリリン・モンローの写真が隠されてあって、それを見た母が、「まあ」と声を上げた。勲三等の叙勲を「勲章などいらん」と拒否したくせにドイツの勲章はありがたく頂いて記念写真を撮って、その裏にモンローの写真を合わせたあたりがなんともおかしかったが、結局祭壇を飾ったのは最晩年の鼻眼鏡をかけた好々爺の写真だった。モンロー自殺のニュースが世界を駆け巡ったのは、辰雄がドイツのハンブルグ大学へ赴任した夏のことだから、おそらくこの時モンローの存在を知ったのだろう。没後刊行された『靈界の星々』にマリリン・モンローが登場するのも、この渡独を境に辰雄がはっきりと変わったからである。それ以前の辰雄では、マリリン・モンローの「マ」の字も言わなかつたに違いない。

何が辰雄を変えたのか。辰雄がドイツから帰国したのは、1962年4月、58歳のことだったが、学生時代から熱烈なドイツ信奉者だった辰雄が、人生の最後を飾る大イベントとして天にも昇る気持ちでドイツへ行った結果は、「ドイツへの決別」であった。

「我ら幕屋は世界の一級品である」

ドイツから武蔵野幕屋一同へ送ったメッセージは、聖書の師としてきたルターの国から学ぶものは何一つなく、逆に、聖書に全人生をかけてきた辰雄の長い信仰生活はいつの間にかドイツを追い越し、辰雄独自の神学に確信を与えたと伝えている。

帰国の一と月前、辰雄がハンブルク大学でおこなった公開講演「日本新教百年史概観」の第三章は、「突破の神学基礎論」として告白的に語られた。

「私が独りキリストの十字架による罪のゆるしを深く受け取って祈っていたとき、聖靈が私を突破して深く入ってくるのを覚えた。私は座していることすらできず、畳の上にひれ伏してしまった。深く強くみたまに捕らえられたのであった。」

この講演をドイツ人が驚きを持って聞き、東洋から来た人間から「パウロのバプテスマ」を教え

られと語ったとき、辰雄は完全に自我の突破を感じたのだろう。その日本語版が帰国後東京大学教養学部紀要に掲載された（小池辰雄著作集第三巻『無の神学』所収）。

「突破」がこの頃のわが家の流行語であったことはよく記憶している。辰雄はドイツでまったくの「自由自在」を賜って帰国した。

私は、そうした父変貌をまったく知らずに、まだ大学三年生であるにもかかわらず、下級生の女性に夢中になって、その女性とわが家の家庭の雰囲気がピッタリくるという自信を全く持てずに、彼女をどのように家族に紹介したらいいか悩んでいた。そこへ、父の帰国である。父がこの女性を受け入れるかどうかは大いに疑問だった。

あの当時を思い出しながら、父親が、「集会に来なさい」と彼女に言ったシーンだけを思い出した。

「来なくていいよ」と私は言ったが、彼女は次の週の日曜日、集会に現れた。わが家へどのように紹介したらいいかという悩みは、彼女が集会に出了りで一切消えてしまった。長女はすでに嫁に行き、家に残っていたのは次女と私と弟であったが、子どもの誰一人集会には出なかつたところへ、私のガールフレンドが登場したので父は密かに喜んだ。

ドイツで毎週ルーテル派の教会に通っていた辰雄は、「男たちはダメだ」と書いている。教会を熱心に支えていたのはドイツ女性たちだった。同じように、昭和25年の靈的体験以来、辰雄の集会を支え続けたのは女性たちだったという思いを、帰国後改めて強く感じるようになったらしい。それから三年後、父の司式で私はその女性と結婚することになる。



1961年8月11日～13日箱根夏季特別集会メンバー（前列中央が小池順子）この集会は「世界の一級品」だといった。